

ASDC(アイカツシステム・ディベロッパーズ・コンソーシアム)所属エンジニア兼、オフィス・フィーエ・ヴィーテラ所属アイドル、召苗吾華音は悩んでいた。

「いや確かに、オフに入るまでは仕事受けますって言ったのあたしだけど」

「いいじゃない、ちゃんとオフ貰えたんだから。プレゼントもお捻りも凄かったじゃない。お捻りの所得税申告は私やるから」

「だからって！ライブ終わってから日付変わってオフ入るまでのたった4時間で！なんで短く見積もって3ヶ月分のオファー来てるの！」

「今まで溜めてたって事でしょ。新ちゃんやアーヤへのオファーも増えたし良かったじゃない」

「ライブの準備期間にサスペンド入ってたプロデュースとかもあるんだよー…これ駄目絶対無理」

「嫌なら蹴ればいいのに。簡単よ？」

ごねる吾華音にアンジェリカはしれつと言い放つ。

「あれだけ派手なお披露目して仕事蹴るとかないから！」

「え？私に来たのは全部蹴ったよ？いつも通り」

「アン姉はそれでいいかもだけど！」

「はいはい」

吾華音の手からiPadとペンを取り上げるアンジェリカ。

自分のトートバッグにしまい込む。

「マネジメントはオフの後で私がちゃんとやっただけから、今はちゃんと休もう。お休み中の対応してくれてるティアラさんや織姫さんに悪いでしょ」

「気が休まらないよー…」

「そのワーカーホリックもいい機会だから治そう。お手本ならほら、目

の前に。運転席にも」

「なにになにー？なんのハナシ？」

少し遠巻きからアリーシャの声がする。一行は、タルコフスキー家持ちの大型観光バス改装の超高級キャンパーで移動中だった。

「アーヤ1日36時間くらいあるんじゃないの？って話」

「フフフ、バレちゃ仕方ない！ってホントにそーならありがたいけどねー。せめて乗り物が速くなんないかなー」

アリーシャは今でも月の1／3は海外だ。仕事と趣味が合致しているとはいえ、新しい事を見つけるための完全なオフは4人の中で一番少ない。それでも今回のオフでも運転手を務めてくれている。吾華音のために何かしたい気持ちが透ける。それは吾華音本人にも伝わっているのだが。

「私もお姉ちゃんのお仕事、できそうなこと覚えた方がいいかな」

「新は今のままがいいから。最低でも5年経った頃にその言葉また聞かせて」

助手席の新も眉を顰める。デビューは軽率だったかな、と思いながら吾華音がTVをつけると、ちょうど大空お天気のコナーだった。早朝出発したがまだTKYの電波の範囲内。

『皆さんは週末いかがでしたか？私は昨日、お世話になっている先生と学校の友人が出ているライブに招かれて行ってきました。服部ユウちゃんと一緒に歌う機会を貰えて嬉しかったです！それに先生たちとっても素敵でした！私も素敵な1週間を送れそうです！』

「あかりちゃんは凄いな、私よりスケジュール詰まってるだろうに」

「今は何でも楽しいから、ってあかりちゃん言ってたよ。私もわかる、

お休みでもお仕事でも、今は楽しいよ。昨日が終わったら抜け殻かなあって思ったけど、今もすごく楽しいもん」

新の言葉に、ふと星宮の言葉を思い出す吾華音。

『自分が楽しいこと知らないと、誰も笑顔にできないよ』

「楽しい、か。何だろう、私の『楽しい』って」

「ちょっ…大丈夫なの！？吾華音」

アンジェリカが本気で心配げな顔をする。

しかしアリーシャがすかさず一言。

「何言ってるのさアカネ、昨日一番楽しそうにしてたの、アカネじゃん」

「お姉ちゃんはちょっと抜け殻気味なだけだよ」

新も言葉を続けた。はっとする。

無意識にアンジェリカの顔を見る吾華音。

アンジェリカは軽くため息をつくとき、一言。

「まあ、歌うくらいなら仕事に入らないんじゃない？」

吾華音の表情が明るくなる。

「よおっし、これから1週間、マジカルミステリーツアーだ！歌いながら遊んじゃうぞ！」

その週、キラキラッター上では、東北北海道方面で毎日起きるゲリラライブが話題になった。ツーリング中のバイク乗り相手にサービスエリア

でロックを歌い、防波堤で釣りをしながら演歌を歌い、温泉に浸かりながら民謡を歌い。

結果、オフ明けの吾華音はアイドルの仕事をさらに増やすのだが、本人は上機嫌だった。

召苗吾華音の長い芸能生活の始まりである。

余談ではあるが、旅の終わり。姉妹は揃って実家に戻った。15年以上を経て再び道場に呼び出された吾華音は、祖父との真剣勝負に勝利する。

「やはりお前は本物だった。しかし、この道も間違いではなかったと思う。故に儂は許せとは言わん。これを持っていきなさい」

そう言って祖父が渡したのは、流派に伝わる吾華音の知らない技、そして影の側の技を、祖父がわざわざ書き起こしたものだ。新の鍵となる術も記されている。本来は継承者の配偶者が伝承する系譜だが、祖母が夭折した事で長く失伝していた。父の代には存在しなかった事になる。

凶らずも、武の道でも陰日向両方の使い手となる資格を得た吾華音。一言。

「たまには、帰ってきてもいいですか？」

厳格な祖父が、初めて涙を見せつつ、答えた。

「たまにと言わず、いつでも何度でも来ておくれ。そしてあの素晴らしい歌を聴かせてほしい」

新はあのステージに祖父を招待していた。

...

---

翌年から、宗家の神事を取り仕切る巫女は2人となった。

---

長い確執の物語は終わり、吾華音の物語がまた1つ幕を開けた。

---